

<シンポジウム詳細>

(石田) 皆様、お忙しい中ご参集、ありがとうございます。ただ今より、特色 GP 選定記念 平成 20 年度特別シンポジウム「特色 GP がもたらしたモノ——駒沢女子大学の場合——」を始めます。

はじめに、学長の戸田よりごあいさつ申し上げます。学長先生、よろしく申し上げます。

(戸田) こんにちは。今日は、特色ある優れた取組ということで選定された「自主自立を促すための面倒見ある教育」という本学の取組のいわば総括というシンポジウムになるようですが。

実は、これは平成 18 年度に選定されましたけれども、確か平成 14 年度から、当時は特色 GP ではなくてもう少し長い名称のものでしたが、それに応募していきまして、平成 18 年度になってやっと選定されたというものです。

この総括報告書にも書きましたが、「自主自立を促すための面倒見ある教育」という、その由来についてちょっと触れておきます。本学の教育目標、建学の精神は置いておきまして、教育目標というのは「十分に自己を実現し、新しい文化の創造的担い手となる人間性豊かな現代女性を養成する」という目標がございまして、そのことと「自主自立を促すための面倒見ある教育」との関係ですが、そのような女性を育成するためには、「新しい文化の創造的担い手」、「十分に自己を実現する」、そういったところからしても、いわば自主的というより主体的と言った方がいいですか、主体的な学生を育てると。つまり、自分で自分の課題を発見し、それを解決して、外部に、外に発信していく。その発信というのは、自分の意見をきちんと述べるというような意味で、当時は考えていたんですが、いずれにしてもそういった女性を育てることが大事だと。そういうことで、自主自立を促すことが銘打たれたということになります。

そのためになぜ面倒見ある教育なのか。面倒を見れば見るほど、自主性、依頼心がどんどんどんどん増長されて、むしろ自主自立というものが消えていくといえますか、失われてしまうということを想定するわけですけれども。最初に出した平成 14 年度から平成 18 年度に至るまでは、自主自立を促すということと面倒見あるということとは矛盾しているのではないかと、という受け取られ方があった。確か選定された際にもそのように言われた人がいたと記憶しております。ですから説明が大変だったのですが、ただ、今入ってくる学生、たまたま今日は学生がいないので言いやすいんですが、自分で自分の物事も解決できないような、いわば依頼心が強い、言ってみれば受信型、受け身のそういう学生が多いと。その学生達は、ただ放っておいて勝手にしろ、つまり、いわば自主的にやれと言っても実は伸びるはずがない。むしろそういう学生達に対してはきめの細かな、懇切丁寧な指導によってむしろ自主性に目覚めさせる、主体性に目覚めさせるということは必要だと。そういうことで、これが 1 つの我々の取組として立てられたわけです。その意味で、本学の教育目標と結び付いていると、こちらでは自負しているわけですが。

さらにその後 3 年間、今年度まで、いろいろな活動をしてまいりました。1 つは、これはユニークな企画で、学生を含めた、あるいは学生を中心としたと言ってもいいんですが、学内シンポジウムが行われました。これは、いわば「自主自立を促す」という、それにもマッチしているといったものでございまして。

さらに 2 回目は、選定委員の 1 人である東海大教授の安岡高志先生を招いてセミナーが行われました。ここでは、本学の取組を称賛する言葉が聞かれました。その後、もう一度シンポジウム、これは学内の教職員を中心としたんですが、外部からも何人か来られたシンポジウムが行われました。

その他、全国各地で行われているフォーラム、それからポスターセッションといいますが、それにも数多く参加しました。ですから、選定された後の活動もかなり活発に行われたと思います。

ともかくそういう形で今回、総括のシンポジウムを迎えるわけですが、実は総括というのはこれでおしまいではなくて、これから始まりというか、今後のはじめを目指したものでして、その点、何か建設的なご意見が出てくることがあればありがたいと思っております。以上、あいさつに代えて。

(石田) ありがとうございます。

それでは、ただ今よりシンポジウムに入りたいと思いますので、学科主任の先生方、お席の順にこちらにお願いいたします。

(席移動)

(小川) 今回の特色 GP 特別シンポジウムは 3 年間の総括となりますので、最後の質疑応答で活発な議論が予測される、あるいはそのようになることが期待されています。従って、15 時終了という予定ですが、進み具合によって若干の時間の延長があり得るということをご了承願いたいと思います。

あと、これから報告していただく主任の先生、15 分以内という時間をどうぞお守りいただきたく、よろしくお願いいたします。

(石田) それからもう 1 点、お知らせ事項を付け加えさせていただきます。14 時 55 分までに前半を終わって 10 分間休憩を取る予定です。休憩なしではなく、1 時間半ほどたったところに休憩があるということをご了解をお願いいたします。それでは、早速プログラムに従って進めてまいりたいと思います。

特色 GP の申請に関わった教育研究プログラム委員長の羽鳥より、まず最初にこれまでの報告をお願いいたします。

(羽鳥) 羽鳥です。よろしくお願いいたします。

先ほど学長先生からお話もありました通り、特色 GP への本学の取組の開始は平成 14 年の秋にさかのぼります。つまり、現在から振り返りますと、約 6 年半前からこの取組を行ってきております。

現在は教育研究プログラム委員会と名前が変わっておりますが、当初は特色ある大学教育支援プログラム対策委員会という長い名前からスタートしております。

当時の議事録を見えますと、教育内容として付加価値ある専門教育プログラム、教育方法としてビデオ復習講座、自前教科書、そして再指導・再試験制度。これに加えて、開学以来実施してきた基礎ゼミを加えて、特色 GP として「自主自立を促すための面倒見ある教育」ということで提出しました。最終的には、2 年間選定は至らなかったわけですが、平成 18 年度に選定を受けました。

この間、ビデオ復習講座に関して申しますと、当初は学生が授業を欠席したときの復習用ということでスタートしたわけですが、現在では図書館で公開して FD 活動にも利用できる、さらには学生が履修を決定する際の参考資料としても使われております。

それから自前教科書ですが、平成 15 年度にスタートした時点では 8 冊だったんですが、現在はその 10 倍を超える 84 冊が自前教科書として通常の授業の中で使われております。

この教育研究プログラム委員会の活動、あるいは特色 GP の委員会の活動としては、先ほど学長先生からお話がありました通り、取組の検証をすることが 1 つの柱にあります。これについては重複するので省略いたしますが、もう 1 つ重要な活動として広報ならびに情報の収集、特に GP に選定された他大学の取組についての情報を収集してくるという点です。この点については、報告書の 10 ページに表があります。またその詳しい内容については、53 ページから 58 ページをご参照いただければと思います。

他大学を訪問して情報を収集してくるということですが、これは当初は委員が中心になって他大学に行っていました。現在は委員以外の先生方にも情報の収集をお願いして、報告書まで作っていただいております。

最後に、特色 GP に対する他大学の取組ですが、一言で申し上げますと、非常に熱心かつ積極的に他大学では取り組んでいるということでもあります。文科省の合同フォーラム、ポスターセッション、これには事前の申し込みが必要ですし、しかもこれは早く申し込まないと人数制限があって締め切られてしまう。そして、その会場に行ってみますと、立ち見が毎回出るというぐらいで、非常に他大学では熱心に取り組んでいると思います。もちろん本学も熱心に取り組んでおりますが。

GP の選定と募生ということに関して申しますと、どこまで直接的につながり、プラスの効果をもたらすか

ということは分かりませんが、少なくともこの GP への取組は、大学の生き残りということを考えると必須条件であると思います。本学が実践している取組に関して、対学生はもちろんですが、引き続き外部にも発信していく、このことは非常に重要だと考えております。

(石田) ありがとうございました。

それでは、学科ごとにこれまでの総括、それから今後の展望についてお話しいただきたいと思います。

まず、日本文化学科の学科主任、安藤先生、お願いします。

(安藤) それでは、日本文化学科の方から報告申し上げます。

特色 GP の各種の取組の中で、特に授業録画とか自前教科書、再指導等については全学的な課題として評価もだいたい出ているということなので、日本文化学科では特に基礎ゼミと付加価値を中心に学科会で議論し総括させていただきました。

まず「基礎ゼミ」ですが、このたびの総括報告書の 12 ページにございます。それに基づいてお話しさせていただきますが、日本文化学科の基礎ゼミは 1 年次では第 1 に大学の基礎的な学習方法を習得させることを目的とする初年次教育、第 2 には、高校までの学習で不足している個所の一部を補うための基礎学力教育、第 3 には課外教育の 3 つの内容で構成されております。

現在、担当教員は日本文化学科の 3 つのコースから 1 人ずつ計 3 名で受け持っておりますが、このうち第 1 番目の初年次教育では、最初に時間割りの作成、授業の受け方、4 年間の流れの説明、または資料の調べ方や図書館利用法、パソコンでの検索方法等を習得させるところからスタートしております。その上で、プレゼンテーション力を身に付けさせていく指導をしております。

自らテーマを探し、関連資料を調べ、筋道を立てて発表するという一連の流れをこの個人発表、またはグループ発表の 2 つの形態で実施しております。本年度前期は百余名の人物から一人を選んで個人発表をするというようなことをしておりますし、後期では最初、江戸東京博物館に正課外活動として見学に行きまして、そこで自分たちの研究テーマを探し出し、そのテーマについて、グループによるプレゼンテーションを行いました。

昨年度までは「日本文化を旅する」とか、「東京発見」とか、「時代を旅する」とか、それぞれ学生の状況を把握しながらテーマを選定しておりました。なお、これらの発表については、お互いに評価し合うという形態も取っております。そのためのポイント制の導入なども図られておりまして、「基礎ゼミ I II」の教科書には評価項目にポイントを記入できる頁もございます。

なお、この初年次教育として日本文化学科では、本学の建学の精神の説明なども改めて授業として行っております。仏教学でも勿論行っているのですが、それとは別に、本学の教育理念をあらためて確認させるという意味で行っておりますし、毎週月曜日の昼休みに行われている学燈会の参加率も 1 年次生は参加率も比較的高いようでございます。

続きまして、第 2 の基礎学力教育ですが、これは日本文化を学ぶ上で基本的な教養、高校で学んできた学習内容をもう一度再確認することをしていきます。たとえば地理的な知識などについては、白地図などを用いたミニテストなども実施しております。また夏休み中に 5 冊以上の読書を促すために学科の先生方のご協力を得まして、読書リストを作成して指導していますが、こうした読書体験から、自分の専門分野の動機付けになったという学生の事例も確かにございましたので、この夏休み読書体験というものも有効ではないかと思っております。

続きまして、第 3 の課外での教育ですね。通常の授業で行う以外の取組としては、最初に 4 月に新入生対象の歓迎会、それから 5 月には教員との昼食会、7 月には個人面談、10 月には研究室訪問を行っております。

このうち新入生歓迎会は入学式後間もないオリエンテーション中に小ホールで実施するのですが、このような教員や先輩学生たちと交流する機会を 4 月上旬という早い時期に設定することに意味があると考えております。この会の実施にあたっては毎年いろいろな試みが基礎ゼミ教員から提案されてきました。たとえば新入生全員に自己アピール用の名刺を作らせまして 30 枚ほどだったでしょうか、それをコピーして各自に

渡し、その名刺をもって30人の人と自己紹介しながら話が盛り上がったこともありました。また、上級生にイニシアチブをとらせて企画させ教員と新入生との交流を図ったこともありました。いろいろな工夫が基礎ゼミ教員から発案されて実施されております。

また、研究室訪問ですが、これは毎年10月に研究室訪問週間を設け、その期間にできるだけ多く教員の研究室に学生たちが訪問するよう働きかけています。しかし、ただ訪問しようと呼びかけるだけでは、学生はなかなか積極的に訪問しません。そこで勉強のことなどの質問事項を記入できる訪問用紙を学生たちに持たせ、期間中必ずどこかの研究室に訪問することとし、教員はその用紙の質問事項に答えながら学生とのコミュニケーションをはかっていく、というやり方をしています。その訪問用紙は訪問を受けた教員が保管し、各教員から訪問状況の報告を受けて基礎ゼミ教員が各学生の動向を把握するというをしています。なお、この研究室訪問の前提として、1週間のうち教員が研究室で対応できる時間帯を予め細かく把握し、この情報を新入生たちに知らせるようにしております。

その他にもいろいろ取組はございますが、特に昨年度は日本文化学科で保証人、いわゆるご父母の方を対象とする授業参観を行いました。仏教学の授業でしたが、照心館で坐禅実習を見学した希望者には一緒に坐禅をしていただき、それが終わった後に懇談する機会を設けました。その際個々の学生さんの大学生生活の様子などの質問や心配な点などをうかがうことができ、有意義な時間となりました。

次に2年次の「基礎ゼミⅢ」ですが、3年次からのコース選択を意識した授業内容を行っています。日本文化学科では2年次後期からは基礎演習という科目、すなわち専門演習に入る前に学んでおくべき基礎的な知識、学習方法を半年間前倒した科目がございます。

専門ゼミのお試し期間といますか、プレゼミのような科目です。そこで「基礎ゼミⅢ」ではその前段階として各コースの専門的学習につながっていくような授業内容が行われています。先ほど述べましたように基礎ゼミ担当者は各コースから1名ずつ出ておりますので、2年次生を3つに分けて、それぞれの3人の各コースの先生のクラスを順番に回って全体のコースのことを学んでいきます。学生たちはその中で自分のコース選を徐々に確定していくというような体制を取っております。

ところで、このような日本文化学科での基礎ゼミの授業の運営については、効果的に授業を展開するために、担当教員3名が毎回打ち合わせをした上で授業に臨んでおります。その打ち合わせの具体的内容ですが、配布プリントのこと・教授内容・の分担などですが、これ以外にも打ち合わせとは別に、会議室でシラバスの検討、自前教科書の作成、試験問題の作成、再試験の検討などが話し合われております。さらに必要に応じて、この会議には、例えば「日本語の基礎」という1年次配当の必修科目の教員も参加することもあり、いわゆる基礎ゼミ拡大会議も1年次生対策として開かれております。さきほど、基礎ゼミ担当者から会議録をいただいたのですが、この1年間に14回行っております。これは毎回の打ち合わせとはまた別にしているとのこと。

こうした運営上の確認を踏まえて、「基礎ゼミⅠⅡ」ではこれまで自前教科書を平成17年に作成し、平成19年、平成20年とその後2回改定しております。これは毎年プリントを配布したものを取り込みながら作成しておりますが、一方では入学してくる学生が年度を追うごとに変化しておりまして、その対応という点から改定をせざるを得ないという状況も出てきております。

ですから、先ほど申し上げましたように、毎回「基礎ゼミ」担当の先生たちは、シラバスに基づきながらも、やはり新入生の学生の特徴に応じた形で、緊密な形で打ち合わせながら運営をしております。先日の学科会でも、入学してくる学生の基礎教養、コミュニケーション能力など、さまざまな問題点について議論したところですが、基礎ゼミの授業運営は大変苦勞しているところです。

最後に、「特色GPがもたらしたもの」ということについてですが、これまでの「基礎ゼミ」の取組の中で、1年次生の日本語力あるいは日本文化に関する基礎知識の実態把握とその対応が課題とされており、これが契機になって、学科会において他の1年次の入門科目や基礎教養科目などの授業内容を見直していこうということになりました。すなわち学科会で1年生のための入門科目を中心に、担当教員の各シラバスを提示合って検討したということもございました。それが「基礎ゼミ」発の提言でなされたということは、学科としては非常に意味あるものであったかと思えます。

こうした検討の末、日本文化学科では、この平成21年度から「基礎ゼミ」を基軸とした新たな科目群を設けることになりました。それは「現代日本の文化」という科目群と「日本語の基礎」・「日本語の応用」・「日本語の実践」という科目群で、この二つの科目群はともに3年間必修としています。これは従来の「基礎ゼミ」をさらに拡大充実する方向で展開されたカリキュラムといえます。すなわち「基礎ゼミ」における発信型の学習を柱としながら、さらに日本語能力を強化し、現代社会に対応できる幅広い教養を身につけるという2つの柱を立てました。3年間必修として基礎学力を十分身に付けさせた上で専門的な学習に対応できる応用力をつけるべく、しっかり教育していこうということです。

このように基礎ゼミを中心軸としながら2つの柱が設定されたのですが、今後はこうした「基礎ゼミ」との関連をさらに情報処理の科目や入門科目などとも緊密な補完関係を維持して発展させていこうという方向で、学科で検討しているところです。

最後に付加価値ある専門教育プログラムについてふれたいと思います。この学際的で学科横断的な教育を意図したこのプログラムに関しては、それぞれ科目を提供した先生方からご意見がございました。

まずは、「高齢社会」と「Life」のそれぞれのテーマに授業内容で合わせていくということに関してですが、科目によっては難しい部分があったようです。科目ごとの温度差といいますか、そういうものが指摘されております。それから、せっかく横断的に学際的な内容として企画されたプログラムであるならば、各テーマが設定された後、講義担当教員の連絡協議会をもっと緊密にやるべきではなかったかというような指摘もございました。ただ、こうした学科を横断したテーマで実施していくという発想は、これまで学科単位で考えられてきた状況を打破しようとした試みとして、私は改めて評価されるべきことではないかと思っております。これをやめてしまうのではなく、むしろ今後これを有効な形で充実させ展開させていくことが必要ではなかろうかと考えております。

以上、日本文化学科からの報告を終わりにいたします。

(石田) 安藤先生、ありがとうございました。

それでは、国際文化学科のケースについて、学科主任の加藤先生、お願いします。

(加藤) 国際文化学科も基礎ゼミの話が中心になると思います。

付加価値ある専門教育プログラムの方は、現在、2人の先生しか参加していませんので、ここでは省略させていただきます。

基礎ゼミの方は特色GPの縦糸の1つということで、あと、横糸を成しているものもすべて取り上げることはできませんので、自前教科書と事前指導・再試験についてお話しして、最後に特色GPが何をもたらしたかということについて触れたいと思います。

まず、基礎ゼミについて申し上げます。最初に強調したいのは、国際文化学科の基礎ゼミは、開学以来一貫して少人数クラスを維持してきたことです。1クラスは15人から18人ですので、その少人数制の中で親しい友人、先生と週1回顔を合わせ、和やかな雰囲気の中で発表し、意見の交換ができるクラスづくりを心掛けてきました。クラスづくり・友達づくりに最大の成果を挙げているのが、入学直後に行う合同合宿です。入学したばかりの学生の抱える不安と緊張をほぐす鍵は、いかに早く友達ができるかにかかっていますので、ここ数年は授業が始まって第2週目の金曜日の午後から土曜日のお昼にかけて八王子の大学セミナーハウスで行っています。

合宿のプログラムは、現在は親睦と勉強のバランスを考えて、全体会での講義とレクリエーション、各ゼミでの親睦会と勉強という形になっています。

講義は金曜日の午後行う合宿、最初のプログラムで、国際文化学科の学生としての自覚を促し、将来の生き方について考えさせるようなテーマで、大学内外の講師にお話ししていただいています。講師の方には講義の後、学生たちと一緒に夕食を取っていただいて交流の機会も設けています。

翌朝、各ゼミで講義について感想・意見を述べ合って、講師にお礼状を書かせています。丸1日にもならない短い時間ですが、一晩を一緒に過ごすことの効果は絶大です。最初の授業では非常に緊張していて、合

宿参加もしたくないとか、不安を抱いている学生たちなのですが、合宿後の授業では見違えるほど明るくなって、クラスの雰囲気がからっと変わります。アンケートでも基礎ゼミ合宿で友達ができて楽しかった、またやりたいという感想がほとんどです。

今まで7年間続けてきましたが、この形で合宿を行っているのは国際文化だけなので、それが残念です。他大学でも行っているように、全学科、全教員参加でオリエンテーション期間に組み入れていただければ、いっそう効果的だと思います。宿泊研修というのはやる前はきっと大変だということで抵抗が多いと思いますが、全学的に取り組んでいただけるようにぜひ考えていただきたいと常々思っております。

基礎ゼミの役割の中心は、調べる、書く、読む、発表するという大学での勉強のやり方の基本を学ぶことにあると考えております。ゼミは学生が主体となって、調べてきたことを分かりやすく発表して、聞き手から質問、コメントを受けて、意見の交換、討論をする場です。ですから、少人数制の話しやすい雰囲気の中で、繰り返しそうした体験を重ねることが大切であると私たちは考えてきました。

基礎ゼミⅠからⅢまでの勉強の流れを簡単に紹介いたします。まず基礎ゼミⅠでは、自前教科書を使って、調べる、発表するなどの基本を押さえ、自己紹介、グループによる発表、本を読んで内容を紹介することなどを行います。

基礎ゼミⅡでは、興味のあるテーマを選んで発表し、レジュメづくりも体験します。聞いている人には質問コメントを書き、発言することが求められます。発表後にはコメントを参考にしてレポートを作成します。

また、基礎ゼミⅡでは、照心館で茶道実習をする機会が設けられて、日本の伝統文化に触れ、静かな雰囲気の中で礼儀作法を学ぶ貴重な時間になっています。このときも講師の先生に後でお礼状を書かせています。

そのほか、学期のはじめには履修指導、時間割りの作成、目標を立てることなどを行い、学期の終わりには反省の機会を与えています。

4年前に基礎ゼミⅢが開設されましたけれども、基礎ゼミⅢではすでにコースを決めているので、自分のコースに関連したテーマを選んで発表し、レポートを書き、専門ゼミでの勉強につなげています。

専門ゼミを決定するまではコース変更を認めていますので、多くのテーマ、考え方に触れるためにも、コース別にはしないで1年次のクラスを解体して新たなクラスを編成しています。

基礎ゼミⅢが開設されたことにより、基礎ゼミへの取組が文字通り学科を挙げてのものになりました。ネイティブの先生を除いて、国際文化学科で基礎ゼミを担当したことがない先生はいません。ですから、基礎ゼミのことを学科全体のものとして考えることができるようになりました。基礎ゼミというのは授業に参加し、発表やレポートなどの課題をこなせば必ず単位が取れるので、再履になる学生は出席が足りなかった者に限られます。

基礎ゼミⅠ・Ⅱでは、この数年間、再履修者の特別クラスを別に設けています。このところ、残念ながら学生数が減ってきていますので、来年度からは基礎ゼミⅢも再履クラスを作ることにしました。

今後の課題としては、クラスの数がないし7ありますので、シラバス、自前教科書などによって、ゼミで扱うべきことを共通認識していますけれども、各段階で押さえておくべきことがすべてのクラスで行われるように、さらに連携を密にしていく必要があります。先ほどの日本文化のお話が非常に参考になりました。

また、特にゆとり教育の世界になってから、学生が学力はもちろんのこと責任感のようなものも低下しておりますので、教科書や授業の内容も個別の対応をさらにきめの細かいものにしていかなければならないと思います。

それから、専門ゼミの選択をどのようにさせるかも課題の1つです。今は基礎ゼミⅢの最後の方を、2回合同で行い、専門ゼミ担当の先生が10分程度で自分のゼミを紹介しています。2年次後期にはゼミはないのですが、専門ゼミを自由に見学する期間を設けていますが、授業と重なって見学できない場合もあり、基礎ゼミⅢの説明会のやり方に工夫を加える必要があると思います。

以上のように、国際文化学科では、16年間、特に、最後にまた強調しますが、少人数制を保持して取組方に工夫を加えながら基礎ゼミを行ってきました。特色GPに基礎ゼミが取り上げられ3年たったこの機会に私たちの取組を振り返ってみて、いろいろ問題はありますけれど、基本は間違っていなかったことが再確認できました。これからも学生の実情に合わせて、さらに発展的取組をしていきたいと思っています。

次に、自前教科書についてお話しします。本学科で今までに作られた自前教科書は、単著 10 点、共著 2 点です。10 点の単著は著者が 4 人の先生に限られおり、数としては多くありませんし、単著に関してはまだまだです。ですけれども、内容は授業に則して作られているので、教える側にとってももちろん使いやすいですし、学生からも授業が分かりやすくなると評価されています。

共著の 1 つが基礎ゼミで、これは自前教科書が始まって第 2 号として 2004 年に初版を出しましたけれども、それ以来毎年改定を重ねて、今年で第 5 版になっています。2006 年に特に大幅な改定を加えて、調べる、読むというようなことに関する部分と、自己分析、目標設定など記入シートの部分を付け加えて、複数の先生で共通した内容の授業を行いやすくする工夫をしました。

これは基礎ゼミの期間だけではなくて、学生にとっても、教員の写真入りの自己紹介、推薦図書とかレポートの書き方などを折に触れて参照できますので、4 年間を通じて活用できるものになっています。

もう 1 つの共著である『英語（オーラル・リーディング）』は、本学科の英語教員が中心となって、非常勤も参加して作り上げたもので、異色の試みと言えると思います。これは全学科で 1 つの科目を 20 名もの教員で教えている英語という科目の特異性を反映しています。

授業の教科書は別に市販のもの。自前教科書は、英語に関する教養を身に付け、言葉の背後にある、文化を理解させる目的で補助教材として作られています。ですから、講義科目のように毎回自前教科書に沿った授業が行われるわけではないので、使う教員にとっても普通の教科書で教えつつ、自前教科書のどの部分をどのように授業に取り入れたらよいのか、戸惑う面があるということが指摘されました。

自前教科書は、まだ取組が充分ではないのですが、作りにくい科目としては、特に図版を入れる必要のある美術関係の科目などがあり、図版の部分を空白にしておいて授業のときにプリントを配ってそこに張らせるのであれば、すぐに作れるという意見もありました。

それから、コンパクトで持ち運びがしやすいものが求められているにもかかわらず、どうしても必要な「判例」などを加えてかなり分厚くなってしまったものもあるということで、今後はこのような点をどのように配慮していくかが課題です。英語の教科書というのは、当初の構想とはずれているものですが、自前教科書の多様化の道を開く試みとして評価できるものです。

次に、再指導・再試験について、これも英語の取組をご紹介します。必修の英語は再指導・再試験が非常に体系的に行われています。先ほども言ったように、英語は非常勤を含めて 20 名という大勢の教員が担当しているので、学生にとって不公平が生じることを避けるために、通常の授業を定期試験に関しても、再指導・再試験に関しても意志の統一を図っています。

再試験の対象になるのは、出席の条件を満たしていて、試験の点数が 60 点に満たない学生のみで、再指導が義務付けられます。この総括報告書に詳しくある通り、再指導においては学生には不合格の理由や問題点が示されて、理解すべき項目を解説、補強が行われています。その効果についても詳しく報告書にあります。

ここで強調したいのは、先ほどの自前教科書も再指導・再試験も、英語の専任だけではなくて、非常勤も全員が参加していることです。さらに英語では、年に 1 回、専任、非常勤すべての担当者を集めて合同会議を開いています。そこでは出席に問題のある学生を確認し、授業の問題点を話し合い、効果的な教授法や CALL 教室の使用法などについて紹介し合い、一種の勉強会のような機会にもなっています。

通常、非常勤は自前教科書、授業録画、アンケートなどによる特色 GP への参加も個人的にはありますけれども、非常勤同士、あるいは非常勤と専任の先生が議論を交わす機会はなかなかありません。ですので、英語は合同会議を通じて非常勤の特色 GP への積極的な参加を促進していると言えます。非常勤は他大学でも教えている人が多いので、広い見地から本学の学生を評価できる面があり、合同会議はお互いにとってよい勉強の機会になっているそうです。

最後に、特色 GP の取組が何をもたらしたかについて少し付け加えます。先週の学科会でやっとこのシンポジウムに向けての話し合いがあり、時間も足りなくて、何がもたらされたか、どのような意識改革が行われたかということまでまとめることができませんでした。その後この問いをメールで投げかけたところ、何人かの先生から回答をいただきましたので、それを最後に読み上げさせていただきます。

・着任当初、GP 自体の理解が十分にできなかったため、シラバスの内容の熟読に努めつつ、諸先生方からのご指導を通じてようやく現在に至って、この取組の全体像が見えてきた気がします。これらの取組を通じて、最終的には常に変化し続ける学生の実情を的確に把握し、彼らの人格全体の成長に寄与できるような授業が実現できるように務めていかなければならないということだけはあらためて自覚できたと思います。

今後とも、これらの取組を通じて、不勉強否点や至らない点等の改善に努めてまいりたいと思います。

・授業が教員の好きなようではなく、学生中心になりました。自分の教えたいことや教えやすいことを教えるのではなく、学生が分かりやすく、関心を持ってついてきてくれることを教えるのです。学ぶ人が中心になったということです。アンケートも自前教科書も録画も再指導・再試験も、一昔前でしたら、勉強しない方が悪い、と片付けられていたことを丁寧の一つ一つ拾い上げて指導するというまさに「面倒見のある」教育です。

・基礎ゼミⅢの授業を通じて、ゼミの学生が発表する、意見を述べるなど、社会に出て役立つことを教えることに意識をより向けるようになりました。

最後に総括的なご意見を紹介いたします。

・この GP を提案するに当たり、先生方の教育における取組の積極化を期待しておりました。結果は GP のそれぞれの内容により、先生方の担当科目との関連で、取組やすいものとそうでないものがあり、残念ながら全般的に積極化が図れたとは思っておりません。今後の GP の立案に当たっては、多くの先生方が積極的に参加できる内容を考えるべきだと思っております。

本学の取組から得られたこと、意識の変化は本学の教育の特色を打ち立て、それを何よりもこのように GP に積極的に応募するという点で外部に発信していかなければならないという点にあります。

補助金を受け入れられるか否かの問題ではなく、本学の教育を向上させると同時に、その独自性を構築できるかどうかの問題です。これこそが本学の教育を充実させ、少子化時代を生き延びる唯一の道だと考えております。これは、言うはやすく行うは難しいことですが、やるしかないという意識を強くしております。

以上で国際文化学科の報告を終わります。

(石田) 加藤先生、ありがとうございました。

それでは、人間関係学科のケースについて、学科主任の富田先生、お願いします。

(富田) よろしく申し上げます。かなり重なる部分もあるのですが、基礎ゼミについて申しますと、私どもが一番人数の多い学科ですので、いかに少人数のゼミを体験していただくかということがポイントになります。ですから、平均すれば 15 名ほど。今年はいろいろ事情があってちょっと増えましたが、それぐらいの人数でゼミをやることによって、確かに教員と学生の結び付きができます。

それから、私どもの基礎ゼミでは全体授業が何回かあります。それは先ほど大学での勉学のリテラシーであるとか、あるいは生活支援に関係することとか、それから専門への導入というのがあります。こういう内容をやりますが、これと少人数でやる、個別ゼミと我々は呼んでいるんですが、それをうまく連携させて、全体授業でやっているようなことを例えば個別ゼミでもっと詳しく話し合っというような形で、そういう教育をしていくやり方を取っております。

当初、やはり個別ゼミごとの質の違いといいますか、先生の個性もございまして、そういう点での公平性ということも話題になって。これに対しては基礎ゼミを担当して下さっている先生方の意見をまとめ毎回、個別ゼミごとのマニュアルを作っていただきまして、そういうものを参照しながら、なるべく均等な、質的に標準化された個別ゼミになるような工夫などもやっております。

それから再履修が若干名いるんですけども、この再履修の学生はいろいろな事情を抱えていますので、その人たちに対応する再履のクラスをやっていただいております。

そして、基礎ゼミ 1、2 が終わると基礎ゼミの 3 になるんですが、これはコース別に分かれておまして、より専門家された専門への導入という部分が強くなって、やがては個別の、3 年、4 年でやるいわゆる専門ゼミへの準備という意味もありますので、そこをつなぐ意味で、これは単位にはなっておりませんがアドバ

イザー制度というのをやっております。

2年の後期に、アドバイザーは決まっておりますので、そのアドバイザーの下で、相談に行ったりあるいは定期的に集まって。方式は先生によって分かりますけれども、コミュニケーションを取ります。これによって、退学防止にも役に立っているんじゃないかと考えています。つまり動機付けの低下を防ぐ効果があるのではないかと考えています。

それから、いろいろな試みをやっております、例えば大学の学問というのは、ものの考え方ですとか、多様な研究法ですとか、そういう点でこれまでの彼女たちが接してきたものと違うわけですが、こうした問題への理解を開くためにシンポジウムのようなこともやってみたりもしました。

そうしたら、意外にこれが学生に評判がよかったですね。これからも、本当に加藤先生のお話を聞いているとうらやましいですが、合宿とか、そういういろいろな試みを我々もまねできるところはまねしながら、そして我々が独自に展開したものは展開しながらさらに進めていきたいということで、これは非常に成果を出しつつあるということではないかと思えます。

それから、付加価値ある専門教育プログラムに関しては、人間関係学科の参加が一番多いですね。というのは、どうしても人間関係学科に関係するテーマなので、そうなったのだと思います。我々の学科は、臨床心理学が大きな柱ではありますが、もう1つ別の柱であるライフデザインというコースを用意しております。これは名前を聞いていただいで分かるようにライフとの重なりますね。そういうライフでの問題意識を高める、あるいは学習の1つのモデルを作る、そういうことにもこの専門教育プログラムが結果的に役に立ったのではないかと考えております。

自前教科書に関しては、先生方にたくさん作っていただいて、これ自体はこれからますます増えていくと思います。そして、皆さんで努力されていますが、一点プラスして申し上げたかったのは、基礎ゼミの教科書を私どもは協力して作っております、これがなかなかよく活用されていると思います。

それは、さっきの加藤先生のお話を聞いていても、それから日本文化のお話を聞いていても同じような状況だと思いますが、私どももこれで助かっています。おそらく自前でなかったらこんな便利な教科書はできなかったわけですから、毎年新しいものが出て、それでいろいろ書き込むようにもなっていたり、出席のカードを張り付けたり、楽しい仕掛けになっております。これは学生も含めて使ってみて、とてもいいなと思いました。そういう意味で、ご担当の先生方の中には、まだご自分の教科書を作っていない方もいますので、とてもいい効果を生んでいるなと思いました。

授業録画に関しては、私個人のことを申し上げてはいけないとは思いますが、当初、安全面とかそういう点での不安がありましたが、幸い安全面は守られています。ですから皆さん安心して加わっていただいた方がいいと思います。

それからもう一点、学習意欲の低い学生が、例えば欠席の多い学生が使うのではないかとというようなことを当初考えて心配していたのですが、そんなことはなくて、学習意欲の高い学生も結構使っていて、自分が、たまたま受けられなかった部分なんかを見ていただいたり、よく聞こえなかったところをもう一度チェックする熱心な学生もいます。そういう意味では、学習意欲の高い学生が使っていることも分かって、これはとてもためになりました。

それから2番目のことで、教員サイドから上がってきたことですが、いわゆる教員自身の授業改善のフィードバックになる。例えば、パワーポイントや板書なども、下手をするとどういうふうに見えるか分からないんですが、こういうものを時々チェックすると、ああ、この大きさじゃいけないとか、この色は溶けちゃうとか、いろいろ工夫をすることができる。そういう意味でのフィードバックになるという意見が出てまいりました。

それから、学科だけで出てきたことをご報告しますが、最後の再指導・再試験の問題ですけれども、こちらの39ページあたりに書いてあるように、間違いを理解させるといいますか、そういう教育効果、これはもちろんあるということですが、しかし、もう一方で繰り返すという、単純なことですけれども、繰り返しによってしっかり学んでもらうことがあるわけです。

ですから、90分1回で足りないというような意見もあるようですが、しかしその90分1回でも繰り返す

ことによって、特に疑問点を出してもらって繰り返すことによって、とてもいい効果が生まれているという意見。これは僕ももっともだと思います。

それから、授業の改善に役に立つ。教員サイドで指導しているときに、どういうところで学生がつまづくのか、このあたりがはっきりする。これは語学の先生からも出ましたし、他の専門科目のご担当の先生方からも出てきました。ああ、ここが分からないというか、ああ、こういう点がなかなか理解してもらいにくいと。それがこの次に教えるときにフィードバック、授業改善に役に立つ、そういう意味も持っている。

それからもう1つ出てきたのは、授業のレベルを高く保つ、そのことにも役に立つのではないかということです。それはどういうことかと申しますと、ちょっと注釈が必要だと思いますが、単に全員合格にすることだけであれば、授業の達成目標を下げればいいです。そうすれば、ほとんどの人は合格点がもらえますね。

そして、こういうふうに合格点をもらえない学生が出るのはいかなものかというような意見もあります。それは教育の実態、現場を知らない人の意見で、それぞれの学生が頑張っても、あるいは頑張らない学生も当然いるわけですが、当然ばらつきが出るわけですね。そこで授業目標を下げてしまっただけでは、これはどうでしょうか。

ですから、それで1回聞いても分からない人に2回教える。さっきの繰り返しということにもなりますけれども、そういう意味ではレベルを下げないで尚かつ、みんながこれを少しでも理解してもらってということを見ると、どうしても再指導とか再試験とか、一見恥ずかしいことのようにですが、そのあたりのきめの細かい対策ということもやはり考えなければいけないという、これは意見です。これもなるほどと思いました。

ですから、分かりやすく言いますと、単に甘やかしているのではないということなんです。高い目標を掲げるためには、そのあたりのフォローもしなきゃいけないというご意見です。このあたりが先生方から出てきた報告です。本当はもっと言いたいこともたくさんありますが、これくらいにさせていただきます。

そして、総括ということになりますが、こういう問題について本当に先生方がたくさん考えている。考えていただくだけでなく、さっきの基礎ゼミのマニュアルに代表されるような、本当に具体的な大変な作業を先生方がやってくれて、これはもうこの報告書に載ってない部分だと思うんですね。そういう効果は間違いなく出ているということは大いに大学としてプライドを持っていいことじゃないかと僕は思います。

(石田) 富田先生、ありがとうございました。

(小川) 3人の先生方にご報告いただきました。あらためて、基礎ゼミが、初年次教育の柱になっているんだという印象を受けました。繰り返しませんけれども、それぞれの学科で工夫をされているということです。

あと、今回のシンポジウムのタイトルになっている「もたらしたもの」、そこから考えますと、例えば日本文化学科では基礎ゼミが中心となって他科目との連携をはかり、新カリキュラムが出来上がっていく。国際文化学科では、英語の科目の中で、自前教科書、再指導・再試験を駆使している。

あと、人間関係学科では授業録画。それは本来学生のためだったんですけども、先生方のFDにも役に立っているという。そのようなところで効果が上がっているのかなという印象を持ちました。

(石田) それでは、これで前半の部を終わります。

ただ今から休憩に入りまして、後半は14時5分から開始いたします。

(休憩)

(石田) それでは時間になりましたので、後半の部を始めたいと思います。先ほどに引き続きまして、各学科での取組によって何がもたらされたのかについて、今度は空間造形学科のケースについて、稲垣先生お願いします。

(稲垣) はい。それでは空間造形学科の取組について、基礎ゼミを中心に報告させていただきます。

入学してくる学生層は他学科と同じように多様化がますます顕著になってきています。1年次の基礎ゼミで大学での学びや専門への導入教育を少人数に分けてきめ細かく行うだけではなかなか難しくなってきましたので、2年から4年次も、一人一人の学生を何らかの形で教員が見守っていくことにより起こり得る問題を早期に発見し、解決への糸口にしたいとの考えから、空間造形学科ではどの学年においても全員を把握できる方法を考えました。

1年次は基礎ゼミⅠ・Ⅱで、基礎ゼミは、空間造形学科の場合入学定員60名で常勤の専任教員が6人おりますので、だいたい1人が6名ずつを担当することになります。また、2年次になりますと、専門必修科目のCADのⅠ・Ⅱというコンピューターを使う授業が2クラスに分かれて行われておりますので、2教員が担当し、1人が30名ずつを見る形になります。

3年次になりますと、平成19年度入学者からコース制を敷いておりますので、コース別プレゼミで各コースの教員が担当することができますし、後期になりますと、空間造形ゼミが始まります。

4年次はコースゼミや卒業研究で、それぞれ3、4年の間は専任教員全員8名で担当しますので、平均すると1教員が7～8名ずつを担当することになります。

毎月行われる学科会では、各授業での欠席がちな学生や、課題が出し遅れている学生についての報告があり、その学生を担当している教員が、友人に事情を聞いたり、本人と連絡を取ったりして、状況を把握して学生の抱えている問題の解決への相談に乗るようにしております。

クラス担任のような教員がいますと、学生にとっても相談しやすいでしょうし、教員にとりましても、今まで一部の面倒見の良い教員に全部負担が掛かっていたという状況から、分担できるという良さおきております。そしてまた、教員がそれぞれ担当している学生が、スムーズに学生生活が送られているか、問題が起きていないか、積極的にかかわる姿勢が見られてきております。

基礎ゼミの授業は、大学での学びの基本習得と仲間づくり、専門への導入教育を通して自主自立を促していくという目的で行っております。

授業の組み立てとしては、講義的内容と軸となるイベント的内容で構成されております。講義的内容としては、大学施設の使い方を1つ取り上げております。空間造形学科では、コンピューターを使用してデザインをするCAD室や設計製図室、木工室、陶芸工房、立体織り工房など専門の施設があり、そこで専用の機材を使っの授業が多いので、教室の使い方や機材の使い方、使用上の注意点などをきめ細かく教え込むようにしております。

また、2つ目としては、大学ではレポートを書く機会が多いので、レポートの書き方の指導を行っております。そのあたりの詳細は報告書に記載してありますが、資料はインターネットを多用せずに1次資料を収集するようとか、感想文のようなものを書くときには、どこまでが自分の主張でどこからが他人の主張なのかをはっきり分けて書くようとか、そのような指導を行っております。

3つ目としては、プレゼンテーションの方法を指導しております。空間造形学科では自分の設計作品やアイデアを人に伝える機会が多いので、プレゼンテーションは大学在学中だけでなく就職後も重要であることを伝え、ツールとしてのボードや映像、模型素材についての説明、また、話の進め方として結論を先に話すのか、それとも序論から順序立てて説明をするのかというような指導も行っております。また、プレゼンテーションボードの作り方とかレイアウトに関しては、コンペで実際に使われているものなどを例に挙げて解説をしております。

夏休み前になりますと、その時期に開催されているデザイン展を列挙し、各自現地に赴き、レポートにする課題を出しています。提出されたレポートはチェックした後、個人指導しながら返却する形を取っております。

基礎ゼミのもう1つの軸でありますイベント風な内容の授業は、前期はバーベキュー大会と江戸東京たてもの園の見学会を行っております。どちらも授業アンケートによる評価は高いのです。バーベキュー大会は若葉台の駅から徒歩15分ぐらいのところの小田良の里にある稲城市の施設で、稲城ふれあいの森で行います。そこには10数基の炉があり、鉄板から食器まで道具は無料で貸し出ししています。学生たちはまきと食材

を持っていけばバーベキューができます。グループごとに献立を考えて、当日は買い物担当や道具準備担当とか、火おこしの担当などに分かれて、全員でグループごとに準備を進めていきます。

グループによっては、お好み焼きを作ったり、カレーライスを作ったり、また、すいとんを作るところもありますし、クレープを作ったり、それぞれグループによって違っていますが、グループで準備している段階でいろいろな話をしていくうちに仲良くなったり、また自分たちのグループでおなががいっぱいになると他のグループのところをのぞきに行ったりと、だんだん混ぜこぜになっていきます。

簡単な遊具もありますので、タイヤに乗ってロープで斜面を降りるターザンごっこをするなど、だんだん童心に帰っていき、最後はグループも何もなくごちゃ混ぜになって笑い転げるというような状況で、学生たちにはとても楽しい時間となっているようです。バーベキュー大会は友達づくりに大変役に立ったという意見が多く見られました。

実際に書かれていることでは、バーベキュー大会で初めて話をして、帰りは一緒にお茶をしたとか、それまで友達になれそうもないと思っていた人が実は気さくな人だったとか、大学に来るのが楽しくなったなどの意見も上がっております。

江戸東京たてもの園は東京都の施設であり、江戸時代の農家から昭和初期の建築まで実物が移築されて展示されています。グループごとに事前学習ではどういうところを見て回ろうかなど、自分たちでコースを決めて、当日は班ごとに、班長と教員も一緒に見学するようにしております。最後は、見学で自分が着目したデザインについてボードにまとめ、全員の前で3分以内に発表する機会をつくっております。

グループごとに教員と一緒に見学することによって、1人では気が付かなかった事柄を発見したり、人によって着眼点が異なっていることを知って、空間造形学科の場合は非常にいろいろなものを見て歩く機会が多いので、専門への導入教育にもつながっております。前期は、なかなか発表といっても人前で話すこと自体が苦手な学生も多く見られます。

後期になりますと、イベント的なものとしては、「りんどう祭のゲートづくり」と見学会を軸に行っております。昨年度までは2回の見学会を軸にしておりましたが、今年度からは共同作業的要素を取り入れてみようということで、「りんどう祭」のゲームづくりを行いました。

グループごとにデザインを考え模型を作ったのデザイン検討、また、グループごとの発表や全員による投票で、最終案2点を選出し、学生リーダーを中心に授業外の時間に自主的に、入れ代わり立ち代わりなのですが、作業して、数日かけて作り上げているものですから、やはり自分たちでデザインしたものを自分たちの手で制作したことで、作品の出来、不出来は別として、達成感は大きかったようです。打ち上げパーティーには、ほとんど全員が参加し、どの顔も満足気で、学年が1つにまとまっているなどということを実感しました。

都市の見学会では、「新しい都市空間を見る」と「古い都市空間を見る」の2つのテーマで行っております。どちらもグループ活動で行っており、事前に、都市再開発などの解説は教員の方で行いますけれども、あとはグループごとに計画して、汐留や六本木に行っております。見学後は各自が見てきたことについて、1人ずつプレゼンテーションで発表しております。

「古い都市空間をつくる」においては、これもグループ単位で活動して、浅草や神楽坂、両国、柴又などを見学する企画を作っております。教員はファシリテーター役を務めて、消極的な学生の発言を促がしたり、発散しがちな意見を修正して方向性を見いだしたりという方に回って、できるだけ学生が自主的に動く形を取っております。

このころになってくると、1年間グループ活動をやってまいりましたので、グループの中には消極的な学生も何人かいますが、その人たちにもグループの一員として発表の分担をするなど、グループ活動が機能するようになってきております。人前で発表することにも、だいぶ慣れてまいります。

基礎ゼミの成果としては、イベント的要素の強いバーベキュー大会や見学会、りんどう祭のゲートづくりなどでは、友達づくりができ、グループ行動、グループ作業によっては仲間意識も強まり、自ら計画し制作していく過程で、自主自立の精神が芽生えていることがうかがえました。

また、基礎ゼミⅠ・Ⅱでは班替えをしているために、より多くの学生と行動を共にする機会ができ、初めの班ではなじめなくても次の班で気の合う友達を見つけて元気になっている学生もいます。

何回か班替えをすることは、学生にとっては友達づくりの機会が増えてよかったようです。教員にとっては、成績を付けるときに、最初に担当した班と、また次に担当した班とで学生がちがいますので、全部を一覧表にして基礎ゼミ担当の先生のところに送って、またフィードバックして、というような形で、ちょっと手間暇は掛かりますけれども、学生にとっては友達づくりに非常に役立っていたようです。

また、コンパクトなクラスですから、学生間とか学生と教員間の連帯感が生まれやすく、教員の目も届きやすいことから、孤立している学生も教員から話し掛けることができまして、早期に発見し対応できるように、孤立する学生は徐々に減ってきております。また、専任教員全員が担当することによる少人数教育の成果も着実に上がっております。教員もきめ細かく対応することに慣れて、他の授業への波及効果も出てきております。

基礎ゼミでの課題としては、プレゼンテーションのスキルアップの面で指導不足の面もあり、達成感があまり感じられていないように見受けられました。プレゼンテーションの事前指導や個別指導の改善を図り、達成感が出るよう個々の指導を徹底させていきたいなと思います。達成感が出てくると、自分に自信を持って前向きに取り組んでいこうという気持ちが出てまいりますので、スキルアップの点は重点を置きたいと思っております。

また、実習室や専門用具の使用や後片付けなどの面で、マナーが全体に低下してきていまして、個々の授業の枠で指導するのも限界が感じられてきておりますので、基礎ゼミ段階でマナーをしっかり教え込んで社会性を身に付けさせたいということも教員の間から上がってきております。

このほかのプログラムとして、付加価値ある専門教育プログラムに関しては、空間造形学科の場合には時間割りの都合上、2コマ続きとか3コマ続きの授業がかなりありますので履修上難しいこともありましたし、また学生にとっては1つのコースを修了しないと他のコースの科目を履修できないということなどもあって自由に選択したい気持ちが先に働いたことと、また、現在では他学科の開講科目が増えておりますので、付加価値ある専門教育プログラムの意図とは別に履修者が少なくなっているという感じです。

教科書の自前化に関しては、空間造形ではやはり写真や図を使うことが多いために著作権の問題があったり、また、白黒印刷であることが多少障壁にはなっております。図版等は映像機械を使い、文章だけで教科書を作ろうとすると、半期の授業で80ページ以上というのが私どもにとっては負担が大きいということがあります。毎回プリントを配布している教員が非常に多いですから、まとめて教科書を作る下地は十分にできておりますので、ページ数に柔軟性を持たせてもらえれば取り組む教員も非常に多くなってくると思います。

また、先ほどの他学科の発表を聞いていますと、基礎ゼミの教科書を作って毎年度改訂をしているということで、確かに基礎ゼミは教科書があると非常に便利ではないかなということを強く感じました。

また、再指導・再試験制度については、コース共通専門性科目に必修科目が10科目あるため、欠席した日の課題や講義の遅れを取り戻し、きちんと理解して次の段階に進むためにも、空間造形の場合には再指導・再試験制度は有効に機能しております。

授業録画に関しては、空間は演習・実習が多いため、実習室で授業が進められていることが多く、実習室に録画システムが設置されないことが1つあります。

学生とのやりとりが多いために、教員が学生の間を動き回ったりということで、黒板を中心に写す固定カメラでは何もとらえられないなど、再生しても授業の状態がよく理解できないということから、講義系の科目でごく一部使われているだけです。それでは欠席した学生にはどう対応しているのかということですが、各教員が個別指導で対応したり、補講期間に時間を取ってまとめて指導したりしているのが現状です。

最後に全体的に特色GPに取り組んでみてどうだったかということですが、基礎ゼミⅠ・Ⅱで常勤の専任の教員全員で取り組むことによって少人数教育で学生を把握し、講義的要素の授業とイベント的要素の授業の組み合わせにより、自主自立を促がすという目的は効果が徐々に現れてきていると思います。

また、その後の2年から4年次も全員を把握できる体制ができていますので、担任的役割を持って見守ることから、個々の授業でも学生の把握に努めるなど、他の授業への波及効果も大きくなっております。

今後の課題としては、専門への導入教育の充実が挙げられます。各教科で共通の問題であるプレゼンテーションのスキルアップの面で、1年次基礎ゼミでしっかり基本を教えるよう、これから授業改善を重ねてい

きたいと思っております。プレゼンテーションのスキルアップは学生の達成感につながって、自信を持って自ら学ぶ姿勢ができていくものと考えられるので、特に重点を置いていきたいと思っております。学生のマナーの向上も1年生のうちに基礎ゼミ段階で徹底していきたいと思っております。以上です。

(石田) 稲垣先生、ありがとうございました。

それでは、今度は映像コミュニケーション学科のケースについて、学科主任の亘先生、お願いします。

(亘) 映像コミュニケーション学科の亘です。

学科の教育の方向が具体的なモノを「デザイン」するという意味では空間造形学科と同様の特色を持っています。映像コミュニケーション学科は、基本的には言語コミュニケーションをベースに置き、これと並行して「映像」、すなわち非言語的なコミュニケーションの教育にあたる、という特色がございます。その結果、日本文化学科をはじめとする言語的な要素を多く含む学科とは、異なる教育的な側面があるということです。したがって、言語と非言語のコミュニケーションの両方の領域に係わる教育上の問題が、これから話のなかに登場するのではないかと、思っております。この点をお含みおきいただいて、話をお聞き願えれば幸いです。

それでは、基礎ゼミを中心に、基礎ゼミからいわゆる映像デザインに係わる実習系の科目にいたる流れのなかで、特色GPが取り組んできた課題を、どのように具現化したのか、同時に、その取組を展開する中で、その先に浮かび上がった課題とは、を含めて、具体的にお話をしていきたいと思っております。

基礎ゼミは、原則映像コミュニケーション学科の教員全員で当たっております。これは学科の教員全員で学生を把握し評価することが重要である、との教育観を学科の教員が共有しているからです。さきほど述べましたように、学生が取り組む課題の中には、いわゆる言葉で書かれたものだけではありません。映像化された作品がでてまいります。それらの作品を評価するさいに教員自身の感性や美的な価値観による評価は避けることができません。一人の教員の価値観で作品を評価することを避けております。言い換えるなら、学生個々人の創造性の芽を育てるために、複眼的な評価を実施しております。

この方向は、基礎ゼミのみならず映像コミュニケーション関係の実習科目でも同様の運営を展開しております。出席の管理、評価素点、学習態度など、学科の教員全員が積極的に係わる形を取っております。先ほど述べましたように、教員個々人の価値観の違いを考慮し、一つの価値観にこだわることなく学生を評価し、その個性を伸ばすことを大切にしております。

基礎ゼミは、基本的に言葉によるコミュニケーション能力を高める点は、今日他の学科がお話ししていることとほぼ変わりありません。映像コミュニケーション学科の基礎ゼミの特色は、映像メディアリテラシーという、映像制作のスキルを学ぶ科目と連動しつつ行っていることにあります。学生が自身でものを考えて作るということをベースにした教育を行ってきました。この制作の場で学科として重視していることがいくつかあります。まず、協同して制作するという視点です。教室という同一空間で一つの目的に向かってモノを作るってどんなことなのかということを学生みんなに考えてほしいということを示しています。すなわち、心を合わせて作品を作るということ。その作品を、みんなの前でさらし、批評されることの大切さを説いております。プレゼンテーションの場には、できる限りの教員がそこに参加して、新たな知の再編の糸口を探る批評や質問などを投げ掛けております。ただ発表すればいいというだけではない、そこから生まれるものを大切にしております。それは、基礎ゼミが終わった後の実習系の科目についても同じで、学科運営の底に流れているポリシーでもあります。学生にとっては自身をさらすという、それから見られるという、そして他者から意識され自身も意識する、そして比較されるということを基礎ゼミをはじめ、実習系の科目の中で徹底しております。

では、つぎに学科としてイベント的な取組は積極的に展開してきたとは言い難いと思います。学年を越えた球技大会を開催している程度であります。別に特別なイベントをしたということではありません。ただし、例えば同人誌みたいなのを作りたいということに関しては、学科の教員レベルで徹底的に面倒を見ていくという方向を取っております。

GPでとりあげてきた発信型の学生を育てるという取組みでは、<教員>と<学生>という二項対立の図

式だけで行っていいのかという疑問をもっております。それに向かって学科が取組んできたのが教育の現場に、ボランティアを含む「地域の力」の活用です。教える側、教えられる側、そして、そこにもう一つの地域の人びととの係わりを加え、動的な枠組みをもつ教育を考えてきました。その予備的な取組としては映像コミュニケーション実習で行政の視点とは異なる若い女性の視点からみた稲城のパンフレットを作りを取組んでいます。

GPで展開してきた再試験の制度への映像コミュニケーション学科としての取組は、いわゆる座学的な科目に関しては再試験の制度に基づき、規定内の時間割りの中に組み込まれている再試験日の中で指導をしています。学科の特色でもある制作、実習系の科目に関しては、それぞれの個々の教員が、作業の遅れが学生に対してどう具体的に対応したらよいかの指示をだすなどきめ細やかに対応しております。もちろん学科会で情報を共有しておりますが、つねに制作をともなう実習科目では、いかに遅れをつくらないかということを考えております。それゆえ、講義の時間内におけるいわゆる再指導という形ではなく、教員の時間の許す限り時間外の個別的な指導を取り組んでおります。

それから録画と教科書の問題ですが、録画の場合も座学の科目では一部行っておりますが、実習室での科目は、設備が完全に整っていないという形で録画ができない部分があります。

実習系の科目では、作品制作の意図、プロセスなど学生全体を対象する説明と個々の学生に対する個別的な指導というところがありますので、先ほど空間の方で話してありましたような、録画システムの画面が黒板を一方向から撮影するだけでは十分に対応しきれないという技術的な問題があり、積極的に活用しているとは言いがたい状況です。

自前教科書についてですが、学科の性格上、写真や絵画のような画像、いわゆる静止画だけをではなく、映画などの動画を取りあげる機会が多いため、カラー化と著作権の問題があります。これは、大学内だけで運用する配信システムを導入すれば、教科書のみならず、学生さんが多様な情報を含む映像を手にいれて学べるのではないかと思います。ここでは、現行の自前教科書では学科の科目の多くが表現制限されるため、その利用は十分ではないと申し上げておきます。

それから、付加価値ある教育に関してですが、このプログラムに係わっているのが私を含め2名です。従って、付加価値ある教育が立ち上がった時点では、どちらかという講義科目を中心にプログラムが組まれておりました。学科では、映像とコミュニケーションを扱う特化した科目が多く、プログラムのテーマに直接なじめないというのが実情です。学科の認識としては、付加価値のある教育プログラムの基本理念に対しては高く評価しております。むしろ、これをもっと上手に推進できないのかというような意見が多く出ております。そういう点では、今後このプログラムを見直し、新たな形でこの種の取組みを導入していくかという問題になってくるんだと思います。

この特色あるGPの中で私どもが感じていたことは、私たちが抱いている「教育」に関する言説。例えば、授業はこうあるべきだ、学生はこういうふうにあるべきだというようなところを1回払拭する、機会を与えてくれたのだと思います。もう一度「大学教育」の言説を疑って掛かる、または私どもの持っている教育観に対して基本的には疑って掛かってみようじゃないか、ということを学科内にもたらしたのではないかと考えております。

学科では、カリキュラムの組み方、その運営の仕方、どのような形で実習すればいいのか。今までの、ある意味においたら文部省ががんじがらめにしていたようなシステムを見直し、従来のシステムを超えて何か新たなものがつくり出せないのかというようなことを考えるきっかけを与えてくれたものだと思います。

簡単ですが、映像の取組、基本的には基礎ゼミを中心とした実習関係の話で終始しましたので、何かそのほかの部分で質問がある方は後ほど受け付けたいと思っております。どうもありがとうございました。

(石田) 亘先生、ありがとうございました。

(小川) 両学科共に基礎ゼミを取り上げました。作品の制作ということにかかわる学科であるせいでしょう

か、若干専門への導入教育という意味が他学科と比べて強いという印象です。いずれにしても、それぞれの学科、基礎ゼミでは工夫を凝らしておりまして、一度学科を超えて意見を交換するような場を設けてみたいという思いをいたしました。

(石田) それではただ今のように、各学科にもたらした取組、本学に特色 GP のもたらした取組、それを踏まえて、今後の課題について教育研究プログラム委員会委員長の羽鳥からお話があります。

羽鳥先生、よろしくお願いします。

(羽鳥) 先ほどの休憩時間にもちょっと隣席の先生方とお話して、日本文化の取組が国際文化学科に取り入れられないか、ぜひ取り入れられたらやってみたいというような話がありました。つまり、基礎ゼミが目指すものというのは、おそらく各学科が本当に創意工夫を重ね、改善して今日に至っているのだということであらためて感じました。

これから少し、あくまでも私案で、教育研究プログラム委員会の方で討議を重ね、総意という形で申し上げるのではないということであらかじめお断りさせていただいて、基礎ゼミと、それから付加価値プログラムのことについて少し私なりの考えというか、大ざっぱな提案をさせていただきたいと思います。

この基礎ゼミのあり方ですけれど、その内容については今のお話を聞いていますと、1つが導入教育の部分、2つ目が課外あるいは学外教育、もう1つが学科の専門に即した基礎学力ないし技術の習得というような形がその基礎ゼミの中身になっているのではないかとこのように受け取れました。

この導入教育の部分ですが、ここには各大学の取組もいろいろあり、本学でもそうですけど、例えばメディア教育、あるいは大学で4年間学んでいく基礎的な教育の部分、それから、大学生活にいかにか慣れていくかという導入の部分、それから専門教育への橋渡しの内容をかなりの部分取り入れる、そのようなことになっているのではないかと思います。

そこで、私が1つ提案を申し上げたい点は、この導入教育の部分で、学科、あるいは学科の特性に関係なく全学科が共通して学べる、あるいは学ぶ部分というのが必要なのではないかという点であります。従前の基礎ゼミは先ほど申しました通り、学科の専門性への橋渡しがかなり重視されてきたのではないかと。これに対して、4年間学ぶ自分の大学について「もっと知ろうじゃないか」というような発想を、基礎ゼミの導入部分の中に取り組みすることはできないだろうかということを考えております。

具体的に申しますと、駒沢女子大学で学ぶうえで前提ないし基礎として、建学の精神に対する理解。先ほど日本文化ではそういう試みをしていると安藤先生からのご報告もありましたが、「駒女学」、あるいは「駒女歳時記」のような部分、自分の大学について知っているようで知らない、あるいはあまり普段意識しないというようなことでも、大学4年間の教育の中で非常に深く結び付いているところがあるのではないかと。そういう部分を導入教育のところ学科の専門とは別の部分でできないだろうかということでもあります。

そうなりますと、基礎ゼミの担当者は仏教学担当の先生ばかりでは当然ございませんので、では、どういう形になるのかなということですが、ただ、本学に籍を置く専任教員は、仏教の専門とか深い知識があるとかいうことにかかわらず、建学の精神というものを共有している。これが前提となっていますので、また、少し口幅ったい言い方ですが、仏教学で仏教のご専門の先生たちが教えられるものとは異なる形でのアプローチもできるのではないかとこのように考えています。これを基礎ゼミの導入教育のコアとして位置付けられないかという提案です。

そもそもこの提案の主旨はどこにあるのかと申しますと、簡単に言ってしまうと、学生が在学中、そして卒業後も含めて大学に対してアイデンティティーをどうやって持ち続けられるかということにつながっていくのではないかと考えます。今年度のホームカミングデーの参加者は、残念ですが必ずしも多くなかったように記憶しております。

そこで、自分が通う大学の建学の精神を理解して、大学について、つまり駒沢女子大学についてよく知り、それを自分に活かし、ひいては他者に活かしていくという、そういうことを基礎ゼミのコアの部分で何とかできないのかということを考えております。そのための準備としてはまたいろいろとあると思いますが、時

間も限られていますので、次の提案に移りたいと思います。

もう1点、付加価値ある専門教育プログラムですが、これは次年度に廃止されることが決定しております。ただし、先ほど何人かの先生もおっしゃっていましたが、付加価値プログラムのコンセプトとして非常に重要なところを何とか活かして発展的に再編できないだろうか、ということがもう1点の提案です。そのコンセプトとしてまず非常に重要な点は、学科横断ということですが、換言すれば、インターディシプリナリー（学際的）という部分を何とか継続できないだろうか。

このプログラムはもともと副タイトルが「幅と奥行のある『専門知』の習得を目指して」となっております。この専門知の習得ということに加えて、もう1つ、リベラルアーツの部分をご追加できないだろうかということでもあります。

その新しい実験的な授業を新科目として何とか打ち立てられないだろうか。その場合に、私自身あまり好きな言葉ではないんですけども、ある程度市民権を得ていると思いますのであえて使わせていただくと、落ちこぼれという言葉があります。これに対して最近使われた言葉に、この対極の意味として噴きこぼれ学生をどうするかという、そういうこともいろいろな大学の取組の中で使われ始めております。

そういう意味では、意欲ある、必ずしも成績がいいということではなくて、学習意欲が旺盛、そういう学生を対象としたような新しい科目をこの付加価値プログラムの発展的再編という形で実現できないだろうかということを考えております。

それはなぜかと申しますと、授業アンケートやゼミ論などの前書きのところ、もう少し高いレベルのことを自分もできたはずなんじゃないかというような。このゼミ論を書いてみて、自分はもうちょっとやれるんじゃないかという意識を持ったというような後書きも散見されます。そういう意味で、学習意欲のある学生も我々は落ちこぼれと同じくらい、そういう学生を対象としたプログラムをやっていく価値はあるのではないかと考えます。

それをある意味で、FD活動の一環として、モデル授業として位置付けてみてはどうか。最終的にそのモデル授業を「高特」とか、あるいは「教育GP」のような申請につなげていくことも視野に入れて、新たな試みができないだろうかということです。

最後になりますが、課題と展望について少しお話をさせていただきます。本学が直面している課題は山積しているのが現状です。募生面でも苦戦を強いられております。その中で、まさに生き残りをかけて可能な取組を実施していかなければならない。ただし、特効薬ないし万能薬というものもなかなか見つからないというのが正直なところ。そうであれば、どういう人材を輩出していくのか、どのように学生を4年間かけて育てていくのかという基本、原点を今一度確認して、建学の理念に基づいて真摯に取り組んでいくことが重要だろうと思います。その意味で、地道な日々の教育こそが特効薬であり万能薬になるのではないかと考えます。

本学が特色GPに選定され、さまざまな新しい取組を開始してきたこと、これは非常に大きな一歩であり前進であったと確信しております。ただ、さらに重要なことは、この3年間の積み重ねを今後も継続して本学独自の教育に活かしていく、これが特色GPの選定を受けた本学の、ある意味で使命であるのではないかと考えられます。

金沢工業大学の学長は、大学改革で大切な点として以下の3点を挙げております。学生が自らの夢や勉学の目的を強く持ち続けられる環境づくりをすること、これを1点目に挙げております。2点目は教育の質を高めること。これは、自分の到達点がどこなのかということを知ってもらうこと、これを2点目に挙げております。そして、3点目に次のように指摘しております。本学は私大であり、収入の多くが学納金によって占められている。このことは保護者の負託に真剣に応えることを意味する。教育の質を高めるための大学間の競争が激化しつつあるが、ビジョンや危機感が欠如する大学は生き残りから取り残されるであろう。厳しい時代である、と結んでおります。

本報告でも書きました通り、外部講師の安岡先生のご指摘、つまり本学の発展のために寄与するつもりがあるか、後輩に本学を勧めたいかという、こういう指標も我々は忘れてはならないと思います。

3年間におけるGPへの取組を終着点としてではなく、最初に戸田学長先生が、おっしゃった点だと思いま

すが、端緒ないし道半ばという意識を教員が共有する機会になった。その意味で、この特色 GP に選定されたことは、本学にとって非常に大きな意味を持ったのであろうと考えております。以上です。

(小川) それでは質疑応答に入りますが、その前にちょっと私からお話をさせてください。すでに、こちらの報告書にまとめてありますように、GP の 5 本の柱のうち、自前教科書、授業録画、再指導・再試験制度、こちらについては結構収穫が多い。今後修正を加えながらも継続していくことが予測されます。

ただ、その中で、授業録画に関しては学生アンケートなどを見ましても、十分に普及していないという面があります。従って、学生に周知させるためにも、例えば新入生のオリエンテーションで、こういう制度があるんだということを紹介したり、あるいは、そのときに保護者とか付き添いの方に対して宣伝するという工夫があってもよいのではないかと思います。

そういうことで、限られた時間の中での質疑応答では、基礎ゼミと、付加価値ある専門教育プログラムについて扱わせていただきたいと思います。

基礎ゼミについては、学部全体に共通する初年次教育であり、GP の柱になっているということ。もう 1 つの付加価値ある専門教育プログラム、こちらは残念ながら平成 21 年度から運用停止となりますが、大学教育における今日的な問題、例えば学士力の充実、さらなる知の進化、そういうことを目標としておりまして、方向性は決して間違っていないと思うんです。この質疑応答を通じてこのプログラムをもう一度考えていくきっかけになればと期待しています。

(石田) それでは質疑応答に入りたいと思います。学科順に申し上げていきますので、ご自分の学科の名前を呼ばれたら、質問したい先生は挙手をお願いいたします。日本文化学科、いかがでしょうか。

それでは、渋谷先生、お願いします。

(渋谷) 基礎ゼミの担当者として質問をいたします。日本文化では安藤主任が説明しましたような取組を行っています。その中で、「もたらしたもの」という観点に絞って考えて、1 点だけ他学科の取組というかどうか考えていらっしゃるのかについてお尋ねしたいと思います。

実は、日本文化学科の中でこのような取組をしていくうち、成績下位者への面倒見という側面が大きなウエイトを占めてくるようになってしまったという現状がございます。そして成績上位者への面がどうしてもないがしろになってしまったのではないかとこの点を反省しております。

他学科ではこの点についてどのように取り組んでいらっしゃるのか、これからどうしようと思っていられるのか、お教えいただけたらと思います。別の面では、今、羽鳥先生が、プログラムという点でのこれからの展望ということをお聞かせいただいたのですが、各学科でもしそういうような上位の者への面倒見ということを考えてやっていたら、ぜひお教えいただけたらと思いました。

(石田) 学科主任の先生方、いかがでしょうか。お答えいただける先生は挙手をお願いします。富田先生、お願いします。

(富田) 難しい問題ですが、上位の人たちに関しては、やっぱり 1 つは個別ですよ。つまりモチベーションが高い学生って分かるわけですから、基礎ゼミを共存することが、いわゆる授業の枠以外のところでのコミュニケーションのきっかけになる、これが 1 つです。もう 1 つは、グループの中で下位者と上位者が一緒にいるわけです。それで、グループの中で、例えばリーダーシップを発揮してもらったり、あるいは立場や成績、能力、そういうのがみんなそれぞれ違うわけですから、そういう異質な人との出会いを通じて、上位者の人たちは自分なりの経験といいますか、そういうものを育てていくということだと思っただけです。集団の授業ということをお前提にした場合ですよ。

ですから、人間関係学科の場合ですと、基礎ゼミ担当の先生方は皆さん心掛けている。だから、学生たち同士でのコミュニケーション、学生個人間での共同作業、こういうものを必ず組み込むようにしている、こ

れが1つです。

もう1つは、個別に相談を受けるという時間を必ず取っていますので、これはどこの学科でもやっていることですが、そういうことを通じて上位者の人たちの個別の願望、これを。私たちの場合は、勉強しようと思えば勉強してもらうことがいくらかでもありますので、その点に関してはそれを受け止めていって個別に指導するということだと。間違いの点もあるかもしれませんが一応、授業の範囲ではそう感じています。

(石田) ありがとうございます。

稲垣先生。

(稲垣) 空間造形学科の場合には、グループ作業が結構多いです。そうしますと、逆に上位者の人はグループを引っ張っていく。先ほど富田先生からお話がありましたけれど、そういう意味で、結構「やり場」を極めた後の達成感というのも非常に高いと思うんです。そうすると、やっぱり自分に自信が付いていって、またもっとやっという自主的な気持ちもどんどん湧いてくると思いますけれども。逆に、先ほどもちょっと学習意欲が低いという話がありましたけれど、そちらの方を上位者が引っ張っていってくれますが、それでもなお学習意欲が低い学生というのがいるんですね。私どもはそこをどういうふうにしていったらいいかというのにまた心を砕いているところですが、

上位者の人たちは、グループ作業を見ていると、あまり発言もしないでいる消極的な学生達にも発表の段階でみんなに仕事をちゃんと割り振って、それでリードしてやっていくというので、逆にグループ作業の中では上位者は達成感を持ってやっていると思っています。

(石田) 亘先生。

(亘) 基本的に、学生個々人に能力差が出るのは致し方のないことだと思います。これは、教育の基本が個人と社会の関係にあると私は思っておりますから、理念として「教育は平等」ですが、現場では、個人と社会の関係が強くてますので「教育の平等」という言葉は少し揺るぐのではないのでしょうか。

今、大学教育で一番大事なことは、ある設定目標をつくったら、先ほどからいろいろな先生がおっしゃっていますけど、設定目標を下げるんじゃなしにして、設定目標を上げたところにどれだけ引き上げるかということ。いわゆる「落ちこぼれ」とは、授業に十分に対応できずについてこれなかった学生をさすものではないのでしょうか。

映像(学科)の場合は、上位者への対応を、制作科目を例にお話します。基本的には作品が出てきますので、その作品に対して、コンセプトのあり方、制作過程、技術的対応などを教員個々人が評価しております。学生の制作姿勢を評価する具体的な言葉をどれだけ掛けることが大切であると思うんです。それ以外、対応は特効薬というのは、私はないと思っています。

教育目標をどのレベルに設定するかは、大変難しいですね。50人いたときのトップ10人ぐらいのところ目標を持ってこようとすると、残りの40人を引き上げるのはものすごく大変だと思っています。それはそれぞれの学科だとか科目のそれぞれの先生のさじ加減になってくると私は思っています。ここを一律に決めるのは難しいし、それぞれ先生の科目の基礎科目、やや専門性の強いもの、そういうようなものところで上げ方って違ってくると思うんです。

ですから、学科の性格上、学生個々に対応するしかない。今述べましたように、きちんとしたいい作品を作った者に対してきちんと認めるというようなこと、教員自身の思いを言葉に託して具体的に語りかけることが大事なんじゃないかなと私どもは考えています。学科では、頑張った学生に対しては「今度頑張ったな」「ちょっと手を抜いたな」などの言い方でしか対応していません。

(石田) ありがとうございます。日本文化学科でまだご質問、ご意見ございますでしょうか。千葉先生、お願いします。

(千葉) それでは、私自身の付加価値ある専門教育プログラムについて、これは質問というよりは意見でありお願いという発言です。私自身、あるいは日本文化学科の付加価値ある専門教育プログラム、いったい何がもたらされたかということと考えますと、そのもたらされたものを長期、中期、短期でまず見極めていただきたいという、その必要性です。

そのうち短期の視野でと申しますと、現在、実感できる反省材料、制度上の問題点や先ほど来ご指摘があります学科や科目による困難さ、こういったものはご指摘の通りであると思います。そこで、私が今ここで申し上げたいのは、中、長期的にもたらされる結果をこれから意識してみないと結果が分からないということをお願いしたいのです。

ただ、これは中期、長期だから今は分からないということではなく、仮に形として表れなくても、むしろそれが本学の特色でもあり、羽鳥先生がご指摘された建学の精神に沿った教育テーマ、方針でもあろうかということをお願いしたいのです。

そもそも、付加価値の2大テーマをこの節目にあたってもう一度考えますと、高齢社会、少子化社会の到来、もう1つはライフ、命と心と暮らしの問題。こちらはいずれも言うまでもなく現代日本が直面している極めて深刻かつ重要な社会問題で、この重要であり深刻な社会問題が、即大学教育の授業で展開されたということは、とても重要な意味があったと節目にあたって思い返したいと思っております。

私自身も実際に専門に閉じこもり過ぎないような形で、常に社会問題を意識しながら、また大学を去った後、卒業生が現実の社会の場で、会社で、あるいは家庭で、それぞれの場で意識していただくような問題を、今までの従来の授業に反応させて授業が展開できたことは自分自身にとっても大変勉強になりましたし、また、ぜひこれはお願いとして今後とも展開できるような道筋として、また、私自身も参加させていただきたいという希望です。

(石田) 千葉先生、ありがとうございました。

それでは、国際文化学科からどなたかご質問、ご意見などございませんでしょうか。弥久保先生、お願いします。

(弥久保) 基礎ゼミを担当している者として、羽鳥先生の今後の課題というところで提案されたことに非常に興味を覚え、私がこれまで考えていたことで、もやもやしていてまとまらなかったものが、今日の羽鳥先生のご提案でかなりまとまりました。こういう点で同感であるという意見を、申し上げたいと思います。

やはり先生がおっしゃったように、基礎ゼミの導入教育の部分で、大学の建学の精神のようなコアになるものを入れたらどうかというご指摘に、私も賛成です。本学は、私立大学ですし、やはり創設者、あるいは建学の精神というのは大事だと思います。

本学は、昨年学園創設80周年を迎えましたが、他の私立大学でも100周年といった節目を迎えたとき、もう一度建学の精神に立ち返ろうということで、「第二の建学」ということで、いろいろな大学がもう一度アイデンティティーの確認ということをしたことは皆さんもご存じだと思うんですが、やはりこれから少子化問題等、経営面からも混沌とした大学経営の時代に入っていくと思います。そういうときこそ羅針盤になるような1つの指針といったものが必要になってくると思います。

それを、基礎ゼミの中で、建学の精神とか教育の理念をどういう形で導入教育に持っていくかということですが、国際文化学科ですから、最初から仏教的なものに関心がある、あるいは日本文化的なものに関心がある学生というのは、やっぱり日本文化学科の方に入っていくと思います。ですから、国際文化学科に入っている学生というのは、最初から仏教とかそういったものにあまり関心を持たない学生、どちらかというところ国際的な、インターナショナルな方に関心がある学生が入ってきます。ただ、私が実際に基礎ゼミの指導をしている学生の中には留学生もおります。定期試験の前に留学生のために定期試験対策などで日本の学生がいろいろなアドバイスをして助け合うことがあります。こういうのを「菩薩行」と言うんだよということを僕は言うんですね。「菩薩行」ということを言うと、学生たちは別にそれが仏教のお教えであることをまった

く理解していませんが、先生、それはいったいどういったところから来ているんですかという質問が出たときに、実はこれは仏教のお教えの一つであると説明したことがありました。

また、ゼミや大学教育全般で先ほど「自主自立を促すための面倒見ある教育」と出ましたけれども、我々教員も、君たちの勉強意欲を、あるいは自主・自立できるような環境整備はするし面倒を見るけども、しかし君たちは受信型ではだめだと。勉強するんだから自分たちも発信型の積極的な対応、教師と生徒が両方そういう意欲が合致して初めて勉強、教育といったものが促進されるんだということを言っております。

これも僕は、こういうのを「啄の機」と言うんだよと言うわけです。そうするとまた生徒は、「啄の機」って何ですかといういろいろ質問をしてくるんですね。そうすると、これは仏教、禅の教えですけども、そういうことをやると、学生は仏教とか禅とか、そういうことにかなり関心を示してくれたりするわけです。

先ほどの「菩薩行」の延長で言いますと、国際文化学科の1つの目玉となっている国際ボランティアがあります。これなんか「菩薩行」を国際社会で行うことですから、建学の精神の行学一如に通じるところがあります。やはり大学全体のコア、核となるようなものがあつた方がいいと思います。

私はそれを、入学前に強調し過ぎると逆にアレルギーを示されますから、むしろ入ってきてからが重要です。羽鳥先生がおっしゃるように、じゃあ、いつがいいかと言ったら、やはりテークオフの段階である基礎ゼミの段階で種をまくといいと思います。

それが大学4年間の導入教育というよりも、むしろ私は建学の精神といったものは卒業してから卒業生にとって必要なものになると思います。むしろ卒業して、いろいろな社会経験を積んだときに初めて、学生時代に言われた当時は分からなかったかもしれないけども、仏教の教えとか建学の精神といったものに後で気が付くときが来ると思います。

そういう意味でも、やはり基礎ゼミの段階で、何らかの形で建学の精神とか、そういったものを導入したらどうかということは非常に実感として持っています。僕がもしお坊さんだったら国際の学生はアレルギーを示しちゃって話を聞かないと思うんですが、俗人である僕がそういう形で言ったからこそ初めて受け入れるという点もあるような気がいたします。

話がまとまらなくなりましたが、羽鳥先生の提案に同感したということで、意見を出させていただきます。

(石田) 弥久保先生、ありがとうございました。時間の問題もございますので、具体例で興味深いお話だったんですが、以後、手短に皆様、お願いいたします。

もうお一方、国際文化で、光田先生お願いします。

(光田) 付加価値なんですけど、付加価値を現在担当しております教諭が、1人が在学研究、もう1人が本日も所用で出席できないということで、国際の付加価値というか、付加価値の評価ということを少しお話しさせていただきたいと思います。

付加価値というのは当初、既存の科目の中で、先ほど2つ、ライフと高齢社会、少子化社会、こういうことに対応ということで設定されたんですが、すでにカリキュラムが決まっていた中で、その授業内容にどう反映させるかということで、3分の1はそれをやってくださいよということで、私も当初それで3分の1ぐらい不公平社会の問題を取り扱っていたわけです。

しかし、その後カリキュラムを改正するときには独自科目として充てていこうと。そして、学長の意見では第2専攻あるいは副専攻というふうにならないかなと、こういう発想で出発したものであったと記憶しております。

そして、当初は1年やったときには、コース会議ということでコースの担当者が、各学科の担当者が集まって、どういうことを教えたか、そしてオーバーラップしているところはないか、3分の1だったらそれをうまく調整できないかということもやっていたんですが、この報告書の27ページ、28ページに載っていますように、当初、受講者数がすごく多かったんですね。それで、担当者の方も安心してしまって、担当者会議を開くとか、そういうときがなくなりました。

もう1つは、既存の科目の中でやることです。テーマに関連できないという科目がたくさん、とにかく先生方がコミットしにくい。国際でも2つしかコミットできなかったというのはまさにそれであったんです。そういう点では不十分であったということが言えると思います。

そこで、将来、先ほどから学科主任の方々の報告の中に、学科横断的な授業というもの、これにはやはり専門知、あるいはそれ以外の知識を得るところに意味があるんだというご意見があったと思います。他学科の授業をただばらばらに見ているというだけでは少し問題が出てまいります。

そこで、学部として各学科の専門的な知識を学生が触れる機会を持つ、そして学部として一体感を持つというふうな点でもまだ有用性があるんじゃないか。従って、今後はテーマの選定、そして各学科で独自科目の選定、そういうより充実した教育を行えるようにシステムの再構築をした上で、付加価値教育の発展的な継承が行われればいいなと思っております。

(石田) ありがとうございます。ほかに国際文化の先生、よろしいでしょうか。

それでは人間関係学科いかがでしょうか。松岡先生、お願いします。

(松岡) 質問ではなくて、むしろ学科主任の先生方のお話を伺っていて、私、基礎ゼミの担当者としていろいろ思い描いたことを、意見までも行かないで感想めいたものになりますが、ちょっとお話しさせていただけたらと思います。

自主自立を促すための面倒見のある教育ということで、そういったことを、またあらためて考えていたんですけれども。何のために自主自立を促すのかということを見ると、今の世の中、現代というこの時代を生きていく、そういう力をも付けるといった目的があるのかなということを感じるんです。

ものすごい勢いで変わっていくこの時代に、どんどん新しいものを利用して、今まであった解決法では解決できないような問題がいっぱい出てくる時代に、どういった形で今まで学んできたものを生かしていけるのかという、そういう活用力とか、あるいはたくさん情報がある中で、それに振り回されずに自分の生き方みたいなことを決めていくという、そういう判断力とか、生きていくための力を身に付けるという、そういうための自主自立を促すという目的があるんじゃないかと思うんです。

ただ、基礎ゼミを担当をしていて、例えばレポートとか、あるいは発表みたいなことを準備させると、先ほどの稲垣先生のお話の中にもちょっとありましたけれども、インターネットとかをのぞいたものを丸写しみたいなものがやっぱり多くて、一応発表してもらって、それに基づいてどういうふうに思うのかみたいなことを問い掛けていくと沈黙してしまうとか。

ただ、先ほどの人間関係学科の取組ということで富田先生がお話しされた中に、今回、個別の面談といいますか、個別対応ということを増やしていったというお話がありましたけれども。私も個別でお話しする中で、一人一人とお話しするとわりと面白いことを考えていたりで、個別の中では出てくるんですけども、集団の中ではちょっと出にくい。自分の考えとか自分の言葉みたいなものにちょっと自信がなくて、借り物の言葉とか借り物の考えみたいなものを使ってしまっている、そういう傾向があるのかなと。

個別の面接をするということはすごく大事ななと痛感したんですが、人数が非常に多くて自分の持っている時間ではとても賄いきれないという問題がすごくあるなというのは今後考えていかなきゃいけない問題だと考えております。

でも、こちらのスタンスとして、学生の持っている自分の考えとか自分の言葉みたいなものをこちらの方が尊重する姿勢がとても大事なんじゃないかなと。そういったものを持つことによって、学生の方が持っているものを伸ばしていくという、そういうことが大事なのかなということをいま一度考えました。

(石田) ありがとうございます。

もうお一方いかがでしょうか。榎本先生、お願いします。

(榎本) 人間関係学科の榎本と申します。

先ほど羽鳥先生のご報告の中で、「基本・原点」というお言葉ありました。それについて手短かに質問したいと思います。

私自身も、自分自身のこととして日々いろいろな現実の中で、学生を前にしてどう接するべきかということを考える際に、やはり基本・原点に立ち返ることがとても重要だと思っています。具体的に言うと2つのことが必要じゃないかと思っています。現状に対する正確な分析と到達目標です。具体的に言い換えると、駒女の学生は何が弱くて、何が欠けていて、何が必要なのかという現状に対する正確な分析と、その彼女たちを4年間でどこまでもっていくか（育て上げるか）という到達点を明確化する、この2つが、私自身にとってもポイントだと思っています。

たぶん大きな質問になるかと思いますが、今日は、取りあえず羽鳥先生がおっしゃった「基本・原点」のお話に結び付けて「どこまでもっていくのか」という到達点の話。羽鳥先生のお話の中で、「ビジョン」についてお尋ねしたいと思います。「どういう人材を輩出していくのか」「自分の到達点」などのキーワードがありました。それを我々はどういうふうに解釈したらいいのかということをお尋ねしたいと思います。言い換えると、例えば本学の教育目的として、「新しい文化の創造的担い手として十分に自己を実現した人間性豊かな現代女性の育成」という目があるわけですが、もう少し具体的なレベルで、例えば、具体的に「こういうことができる」とか、「こういう点がクリアされるべき」などと、もう一段、具体的なレベルで、到達点としてどういうことを考えたらいいのでしょうか。羽鳥先生の私見でも構いませんし、あるいは学科の先生方の私見でも構いませんので、何かヒントをちょうだいできればと思います。

(石田) 羽鳥先生、お願いします。

(羽鳥) 榎本先生の質問に答えるだけの力量がないということをお断りしなければいけない。つまり、その問題をいかに考えていくかということをお断りしなさい。教員全員で意識することがこのGPのもたらした非常に大きな意義であり、それは、一歩だと位置付けられます。これはそれぞれの先生によって考え方がやっぱり違うと思います。

ただ、基礎ゼミという共通科目、しかも必修科目にしている。その中で新たな導入教育の試みをやっていく、それをまたFD活動とつなげていく。その一歩にまずしてはどうかという提案であって、ここで私の榎本先生に対する質問について述べることは、ここでの議論の中心とちょっとずれるような気がしますし、その力量もないということでお断りを願いたいと思います。

(石田) 榎本先生、よろしいでしょうか。ありがとうございました。

それでは空間造形学科はいかがでしょう。安武先生、お願いします。

(安武) 空間造形の安武です。

基礎ゼミを担当しています。今日皆さんの話を聞いて大変ためになる事例があり、うちの学科でもぜひ取り入れてみたいと思いました。基礎ゼミの成果として、羽鳥先生がおっしゃっていた導入教育や課外教育や、学科の専門に即した基礎学力、技術の習得以外に、どの学科にも共通して、学生同士とか学生と教員間の関係づくりも基礎ゼミの非常に重要な部分であると思っています。

その中で、せっかくできた関係を育てていくような場がうちの大学にあるかなというのがGPを聞いて思ったことです。学園内に教諭の目を離れた学生同士で語らったりだとか、そんなに仲良くななくても友人と居合わせる場所だとかーが必要だと思います。大学は立地の問題からくる孤立性や、学内の場所が管理されている部分が多いことから、学生が自由に溜まって、長い時間話してられるような場が少ないのではないかと思います。そういう物理的な居場所づくりも必要だと思います。

空間造形学科の場合は、実習が多く、課題も多いため、模型を作ったり、土をこねたりそういう場所もいくつかありますけれども、他の学科では、学生同士が語らったりという場づくりをはじめ、どういうことを今行っているのか、どういう場があるかということをご紹介いただければと思います。

(石田) 学科主任の先生、いかがでしょうか。加藤先生。

(加藤) 残念ながらそういう場は学食とか、そういうところを除いてないと思います。その弊害と言えるかもしれないですけど、とにかく仲良くなってしまっているんで、基礎ゼミに来るともうおしゃべりが止まらなくなるというようなこともありまして。やはり、さっき富田先生もおっしゃっていましたが人間関係学科は特に人数が多いということですし、ぜひそういう場ができればいいなどは常々思っていることですが、現状はないということです。

(石田) 富田先生、お願いします。

(富田) 今までは失敗が多くてあまり素晴らしい成果を挙げていないので言いにくいのですが、人間学科ではしゃべり場という、時間と場所を設定して、そこで自由にしゃべっておくれと、我々もできるだけ顔を出すからという場を設定してやっているんですが、これがなかなかうまくいきませんね。正直に言って、やはり常に空いている場というのがないと、汎用の教室、みんなで使う教室を昼休みだけ借りて、この時間に来てよと言ってもなかなかこれは難しいですね。

ですから、学生同士というところが本当に難しいと思います。また、教員が呼び出せばすぐ来てくれるんですけども、学生同士でせつかくできた関係を維持するということになる、2～3人の少集団になっちゃうんですね。ですから、そういう点での試みというのを今やっているんですが、やはりぜいたくを言えば、学生が集まれるような場所を確保できると、今後変わっていくんじゃないかなと思います。

場だけがすべてでもないのですね、我々も介入していかなきゃいけないと思います。

(石田) 富田先生、私は人間関係学科なので、現在しゃべり場をどう運用しているか知っているのですが、ご存じでない先生方が多いと思いますので、簡単にご紹介ください。

(富田) 順番に、ゼミの担当の先生が中心なんですが、1週間に1度、時間を決めまして。場所も実習室と決まっているんですけども、そこで、本当はこれはいけないんですかね。お弁当を持ち込んで、ご飯を食べながら何か気楽に話す場ということで、しゃべり場というのを開いておりますが。呼び掛けた先生のゼミの人は来てくれるんですが、それ以外の人の参加はちょっと難しくなったりとか、そういうことでまだ充分にはうまくいきません。これは、もっともっと工夫の余地があると思います。

(石田) ありがとうございます。

(巨) いいですか。

(石田) はい。

(巨) 映像コミュニケーション学科は、基本的に映像の機材を置くところがあります。学生が集まれる、他の学科にはないスペースがあります。しかし、そのスペースには、つねに教員と学生という関係性しかないんですよ。学生にとって、教員と学生という社会性を越えることのできない壁があるのです。ですから、その構造に割ってはいる存在が必要ではないか、学生と教員の通説的存在ですね。たんに、学生の集まるスペースを用意するのではなく、歳の若いティーチングアシスタントの人だとかの力を借りて、運用できないかと思います。

私は、この大学には45歳で入ってきました。そのときはまだ学生との間の距離、年齢的な差がなかったんですが、60歳を過ぎるともうじいさんです。要するに、我々はいつまでたっても学生とは同じ距離にいる

と思っていますが、明らかに年齢は開いていきます。学生と教員の社会性が常に保たれていると思う幻想は捨てるべきだと思います。じゃあ、どのように対応するか、これは我々教員の問題です。そういうような具体的な提案というのが、こういう場でなければ出なかったことがちょっと残念に思っています。

(石田) ありがとうございます。もうよろしいでしょうか。

それではもうお一方、空間造形学科から太田先生、お願いします。

(太田) これは私の付加価値プログラムについての意見になります。付加価値あるプログラムがもし全体としてあまり成功しなかったという部分があったとしたら、意図したところは非常に壮大でいいと思いますが、付加価値プログラムはシステムとして具体的な教育プログラムを持たなかったシステムだったと思います。言い換えると、もっと具体的なもの、学生にとって分かりやすい学際的な横のつながりが見える各講義の仕組みを持ったプログラムを提示していなかったと思います。光田先生がおっしゃったように、そういう具体的なプログラムを持って付加価値教育プログラムの再編成をやると非常に有意義なものになると思います。

15回全部同じテーマでやるかどうかは別ですけども、5回なら5回、文学ということであれば例えば『源氏物語』を各先生がいろいろな視点からしゃべれるわけですね。それは当時の政治制度、あるいは宗教観とか死生観とか多岐にわたって「源氏物語」をみていくことが出来る。例えば我々サイドから見ますと『源氏物語』のああいふルーズな関係、男女の関係というのは、彼ら平安貴族が住んでいた空間のシステムなくしてはあり得ないわけですね。非常に具体的な仕掛けから一つ一つの異なった講義の関係性を持たしていくというのが必要ではないかと思います。そういう具体的なものを提示してプログラムを作っていくといいのではないかというのが私の意見です。

(石田) ありがとうございます。

それでは映像学科コミュニケーション学科、明田川先生。

(明田川) 映像コミュニケーション学科の明田川です。

私も太田先生と同じで、やはり付加価値ある教育プログラムに対して、お時間があれば先生方のご意見を伺いたかったんですけども、羽鳥先生が、今後発展的におっしゃってくださっていますので、一意見としても聞いていただければと思います。

いろいろな見方はあるかと思うんですけども、私は教務委員をやっていたり、それから、ちょっと問題のある学生を担当しているんですけども。やはりそこで感じたところは、太田先生と本当に同じなんですけども、なかなかいろいろな応用が利かない。横の科目のつながりが見えないとか。

ですから、教授会で、例えば退学する学生の理由の多くは進路思案中であったり、進路変更であったりということだと思うんですね。であれば、やはり付加価値のあるようなこういったプログラムをうまくツールとして使って、本当に視野が狭いところを、もうちょっとこういう広がりがあるんだよ、というのを示せるだけでも非常に効果のあるシステムなのではないかなと私個人としては思っております。ですので、ぜひこれを発展的に生かしてもらえたらありがたいのかなと。

映像としては、こういう技術的な授業が多くて、積み重ねの授業が多いのでなかなか参加ができないんですけども、ぜひ映像ともちろん空間の方とかにも参加できるような提案をぜひ議論していただけたらと、ここでは希望としてお願いします。以上です。

(石田) ありがとうございます。

それでは、ほかにも学外からの参加者ですとか、今日は短大の先生方、それから事務の方々もお見えになっていますので、大学の教員以外の方々に、どなたかご質問、ご意見、ご感想などをいただけるのであればお願いしたいと思いますがいかがでしょうか。せっかく遠方よりおいでになった学外の先生方、いかがでしょうか。はい。

(篠) 短期大学食物栄養科の篠です。

いろいろなお話を聞かせていただき、どうもありがとうございました。大学生活の基本的素養を磨く取組が一番やられているのは基礎ゼミだということがよく分かりました実は、全部の学科がそうだと感じたんですが、学年ごとに基礎ゼミをやっていますよね。ということは、同一学年間の横でのつながりを目的にやっておられるとおもいますが、実際には学年は1年から4年まであって、学科として縦のつながりはどういふふうに考えておられるのでしょうか。ちょっとその辺をお伺いしたいと思います。

(石田) はい、ありがとうございます。

学科主任の先生、どなたかいかがでしょうか。あるいはフロアでも結構ですが。亘先生。

(亘) 映像コミュニケーション学科の場合は実習が2年、3年が一緒になります。従って、2年、3年が別々のグループを組む場合もありますし、3年が2年を含む、3年と2年が合同になるグループもあります。そういうような形で、2年、3年の学年を越えた交流の機会があります。実習の場では、その仕組みができています。例えば基礎ゼミでそのような仕掛けが組み込まれているのか、というと、映像はやっておりません。

(石田) はい、稲垣先生。

(稲垣) 基礎ゼミで平成18年度に、1年生と2年生と合同での懇親会を最初にいたしました。そうすると、上の学年からいろいろ教えてもらえるかなと思ひまして。また下級生に伝えたいこともあるだろうと思って、懇親会を4月の初めごろにしましたけど、やっぱり学年で、自分たちで固まっちゃってあまりいい結果にならなかったなと私たちは思ったものですからバーベキューに変えていきました。

学生たちの中には、逆に上の学年と一緒に何かをやる機会ができたらいろいろ教えてもらえたのにとか、そういう場も設定してほしいということは意見としては出てきております。

(石田) ありがとうございます。

(富田) いいですか。

(石田) はい、富田先生。

(富田) 今のはとてもいいヒントだと思いますね。縦のつながりをもっと生かせると思います。それで、個々の専門ゼミの方ですと、学生がそれぞれ似たような研究を目指していたりするので、先輩の研究の後を継ぐみたいなのところもあるんですね。ですから、3年、4年ではそういう縦の関係が非公式な形であると思っています。

ただ、非公式ついでに言えば、もっと本当に先輩と後輩の交流があるような機会を授業以外のところでも、もちろん授業のところに組み込めれば一番いいんでしょうけれども、考えていくのも大事なことで。それは、さっき亘先生がおっしゃったように、もちろん教員が一番責任者なんですが、教員と学生の関係だけではなくもっと若い方と、バッファ的な縦のいい関係というのができていけば伝統が受け継がれていくことになりますね、卒業した後も。だから、クラブなどのレベルでは活発にそれが行われているのは認めるんですが、学科のレベルでもそういうことができるような工夫というのは大いにやるべきだと僕は思います。

(石田) ありがとうございます。

(加藤) 国際の場合はその縦のつながりが特にできているのは、3、4年の専門ゼミで合同にやっているところ

ろです。特にシステマチックにやっているのが英語コミュニケーションコースです。3、4年一緒にやることで、勉強はもちろん、例えば生活面でも就職の情報を先輩から得られるなど、非常に良い面があります。羽鳥先生も3、4年合同ゼミをずっとやっていらっしゃいますよね。私も来年度から試みようと思っております。

(安藤) 日本文化学科でもだいたい同じような状況であるかと思います。

まず日本文化学科の専門演習では一部を除き、ほとんどの演習では3、4年合同でやっております。ですから各ゼミ(専門演習)における先輩と後輩のつながりはできてはおります。

それから、年次が下がって2年生に対して専門演習の選択をする際、専門演習に所属している先輩たちによる専門演習の説明会を実施しました。教員によるゼミ説明会はこれまで各学科でやってきたと思いますが、教室を指定し、1週間昼休みに各専門演習の3年生または4年生がコーナーをそこに設けて2年生の質問や相談を受けるということをいたしました。先生の説明も重要ですが、各演習の様子、雰囲気は先輩達から聞いた方が伝わるということもあるのではないのでしょうか。

それから1年生に対して2年生が新入生歓迎会のときに手伝っていただいて、そこでいろいろと交流をするということをしています。それからかつては1年次生と2年次生の交流会というのをやったことがありますが、その学年の状況を見ながら実施することにしており現在は定期的に行ってはおりません。

学年と学年の壁を越えた関係を構築することはなかなか難しいことで、各学科同じような課題を抱えているのではないかと思います。以上です。

(石田) ありがとうございます。

湘南工科大学からおいでの先生、よろしく申し上げます。

(水谷) 初めまして。私、湘南工科大学というところから参加させていただきました。

私は取組を今日初めてうかがわせていただいたんですけども。まず基礎ゼミということですが、いわゆる導入教育とか初年次教育というのは大事なところで問題になっているテーマです。本学でもやっぱり学力が低い学生がいっぱい入ってくると、入ってきても授業に付いていけず、それがいろいろ問題になっていて、科目例が違いますが同じようなことをやっています。なかなかこれはやってもうまくいかないところがあるので、今日はぜひぶんうまくいったという話がありましたので、具体的にどんな話だったのかをぜひ機会があったら教えていただきたいなと思います。

近年、そういう話は本学だけではなくて、あちらこちらの大学でやっぱり問題になっていて、例えば「初年次教育学会」という学会もできていて、そういうところでも議論されています。私はその中でいくつかの学会にかかわっているんですけども、やはりそういうところでも事例をいろいろ探している段階なので、ぜひ機会があったらそういうところでも発表していただけたらと思います。

それから、付加価値ある専門教育、こちらの方も面白い取組であると思ひまして。要するに、私の理解では本来、専門科目というのがあるんだけれども、それ以外にまた別の専門科目といますか、そういうものがあって、それを勉強できると、そういう感じなのかなと理解しました。

ただ、その場合に本来持っている自分の専門科目と付加価値ある専門科目との関係がどうなのとか、卒業時にどういうふうなそれをカウントするとか。その辺の仕組みはたぶん何かあるかと思うんですけど、その辺が理解できなかったのも、またお時間があつたら教えていただけたらと思います。ありがとうございます。

(石田) ありがとうございます。

(小川) 時間もずいぶん超過してきました。今回の総括シンポジウムを通じて、いろいろなものが見えてきたと感じています。大きくそれを2つに分けますと、1つはもたらしたものというんでしょうか、成果というんでしょうか。こちらの方は我々委員も素直に受け止めようと思っております。

もう1つは、何と言っても問題点です。問題の中で特に注意を引いたのは2つございまして。1つはタイトルにも使われている面倒見という言葉にかかわることですが、成績上位者に対する面倒見という視点がややもすると欠けていたのではないかという指摘です。これが1点。

それからもう1つ、付加価値ある専門教育プログラム。当然さまざまな問題が出てきましたけれども、ただし、想像以上に発展的な継承が望まれているのかなという印象を問題はありませんながらも持てました。

今回のシンポジウムを通じて出てきた様々な問題点をあらためて別の場で話し合い、これで終わらずによりよい教育の場がつくっていければと思っております。

(石田) だいぶ時間を超過してしまって申し訳ございませんが、おかげさまで充実したシンポジウムができたと思います。

これで、特色 GP 選定記念 平成 20 年度特別シンポジウム、「特色 GP がもたらしたもの」を終わります。ご参加ありがとうございました。(拍手)